

## いまを生きる社会運動の行為者

### - A. メルッチの集合行為論を中心に -

保坂直人 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

渋谷治美 埼玉大学教育学部社会科教育講座

キーワード：メルッチ、新しい社会運動、対立、連帯、限界の突破

#### 1. はじめに

現代社会に起こる複雑な諸問題を、まさに問題として可視化し顕在化させる営みのひとつに社会運動が挙げられる<sup>1</sup>。社会運動は、トゥレーヌ(A.Touraine)が指摘するように、社会に潜在する矛盾を公共的な問題として当の社会に知らしめ、既存の秩序が疑わしいことを明らかにし、それに替わる将来への新たな見通しを提起する預言者の役割を果たす。トゥレーヌは、例えば反原子力運動が原子力政策とその政策を司るテクノクラートを中心とする権力とに敵対することを通じて、新しい問題を世論に喚起し、新しい解決の方向に人々の注意を向けさせる、と指摘する<sup>2</sup>。

社会運動は、社会運動論の分野では後述のとおり、ある共通性をもつ集合的な活動として解釈され、「集合行動(collective behavior)」あるいは「集合行為(collective action)」という概念によって分析されてきた。さらに加えて近年に展開される社会運動論は、運動に参加する行為者によどのような特徴が見られるかに注目する。社会運動に参加する行為者は、運動という一つの同じ集合行動ないし集合行為に参加しているからといって、必ずしも同質的に理解されるべきではない。まず運動と参加者とは同質ではない。次いで参加者同士も同質ではない。社会運動に参加する行為者は、そのときどきの行為者固有の目的に応じて、自らのライフプランの一環として社会運動に参加する。こうした今日の社会運動の特徴を浮かび上がらせることが本稿の狙いの一つである。

イタリアの社会学者アルベルト・メルッチ(A.Melucci,1943-2001)は、20世紀後半の高度に発達した産業社会に起こる社会運動を観察し、社会運動に参加する行為者を「いまを生きる遊牧民(ノマド) Nomads of the Present」と表現した。「かつての運動家とは異なり、現代の〔社会運動の〕行為者は、歴史的な普遍の計画によって導かれはしない。むしろ『いま(present)』を生きる遊牧民』のようだ。理論的な術語で述べるならば、今日的に『対立』の場となっているのは“いま”なのである<sup>3</sup>。メルッチの指摘は既存の社会運動論の手法とは異なり、社会運動の外面の形態的な評価にとどまらない。彼は、運動を構成するリーダーや底辺の参加者の役割の差異とその変化、あるいは異なる行為者が運動の内部で引き起こす相互行為などを動的に捉えようとする。メルッチの視点が既存の社会運動論を発展させ、今日の社会運動を的確に説明するのは、社会運動と参加する行為者を(二重の意味で)同質と見なさず、にもかかわらず行為者が集合的に行為しているのはなぜか、という点に焦点を当てるからである。

本稿では第一に、社会運動に関するこれまでの理論的潮流を省みる。まず社会運動を集合的な行動ないし行為として分析してきたアメリカを中心とする社会運動論を、次いでマルクス主義的

な社会運動論を継承する<「新しい社会運動」論>を振り返る。それによって社会運動を理解する際の幾つかの視角を確認するとともに、それらの理論が乗り越えることができなかつた限界も明らかにする。

第二に、メルッチの<「新しい社会運動」論>に注目し、とりわけその鍵概念ともいえる「対立 (conflict)」、<sup>4</sup>「連帯 (solidarity)」、<sup>5</sup>「システムがもつ共存可能性の限界の突破 (breaching of the systems limits of compatibility)」という三つの「指向 (orientation)」について吟味する。メルッチはこの三つの指向を、或る集合行為を「新しい社会運動」と呼ぶための指標として設けることによって、隣接する他の集合行為との関係のなかで当の集合行為を相対化しながら、「新しい社会運動」を社会科学的に理解する視点を提起する。

ところで日本国内でも、確かに 80 年代に<資源動員論>や<「新しい社会運動」論>が関心を集めた。しかしメルッチについては 97 年に山之内靖らが『*Nomads of the Present*』<sup>5</sup>を、08 年に新原道信らが『*The Playing Self*』<sup>6</sup>を邦訳したのみであり、いまだにメルッチの紹介と検討が十分なされたとはいえない。本稿では邦訳されていない英語文献『*Challenging Codes*』<sup>7</sup>、およびメルッチの母国語であるイタリア語によるいくつかの文献を参照しながら、メルッチの独特な社会運動論の紹介と検討を進めたい。

## 2. 社会運動論の基礎的な視角

### 2-1 集合行動としての社会運動

社会運動は 20 世紀中ごろからアメリカ社会学のなかで、共通の衝動によって人々が引き起こす「集合行動 (collective behavior)」として把握された。この「集合行動」という概念は社会運動論の分野において、後に展開される「集合行為 (collective action)」と区別される。後述のとおり集合行為論は、集合行動のなかで行為者が自らの行為をいかに選択したかに注目し、それまでの集合行動についての諸理論から一定の発展を図る。本節では集合行為論への発展に先だって、社会運動論の基礎を築いたマートン、ブルーマー、スメルサーの集合行動論が社会運動に参加する行為者をいかに論じてきたのか、を振り返りたい。

マートン (R.Merton) は、支配体制を否定する社会運動のような集合行動に参加する人々を逸脱者と非同調者とに区別した。マートンによれば、非同調者は「道徳的に不当な規範だと考えているものを捨てて集団の規範を変更し、代わるべき道徳的根拠をもった規範を打ち立てよう」<sup>8</sup>とする者のことである。マートンの積極性はここにある。というのも、これまではそうした人々にまでも支配体制側のイデオロギーによって反社会的な逸脱者であるというレッテルが貼られ、そうした社会運動そのものも逸脱した集合行動として見られてきたからである。マートンは、このようなイデオロギーからそうした社会運動を救い出し、それによって社会運動が既存の支配、秩序、規範を変更する行動でもありうることを説明した。

これに続いてブルーマー (H.Blumer) は、社会運動はその集合行動に関わる行為者の相互行為を通じて新たな問題を提起している、と論じた。ブルーマーが重要視するのは、社会運動という集合行動に関わる行為者の行為の意味である。ブルーマーによれば、まず人間の行為は意味に基づいており、加えて行為の意味は他者との社会的相互作用から導き出され、さらにこの意味は解釈の過程で修正される、という<sup>9</sup>。他者の行為が或る行為者の行為の意味の定義に作用する。

したがって意味は社会的な産物なのである。社会運動に参加する行為者は、自己と他者との相互作用を通じて、既存の制御された文化とは異なる新たな意味を「集合的定義の過程の産物」<sup>10</sup>として創り出す。ブルーマーによれば、このようにして社会運動は行為者が行為の意味を解釈する「新しい秩序と新しい生活を打ち立てる集合的な試み」なのである<sup>11</sup>。

見られるようにマートンやブルーマーは、社会運動を既存の支配に立ち向かい、新たな意味を形成する集合行動として理解する。社会運動は、支配的イデオロギーによって意味付けされるものではない。むしろ社会運動こそ自己と他者との相互作用のなかで、既存の制御された文化とは異なる新たな意味を「集合的定義の過程の産物」として創り出す場なのである<sup>12</sup>。

ついでスメルサーは(N. Smelser)は、集合行動の分析枠組みを精密にすることで、社会運動を集合行動の一形態として浮き彫りにしようとした。スメルサーにとってブルーマーの集合行動論では、集合行動を分析する基準が不明瞭なままにされていると映った。スメルサーによれば、集合行動はその基礎となる「一般化された信念(generalized belief)」に導かれる<sup>13</sup>。これは人々が社会的に行為する際の「価値」、「規範」、「動機付け」、「状況的便益」といった構成素からなる。なかでも前二者が注目される。スメルサーによれば、社会運動は「価値指向運動」もしくは「規範指向運動」と呼ばれる集合行動として扱われ、価値もしくは規範を「復興し、防衛し、変革し、創造しようとする企て」なのである<sup>14</sup>。これらの道具立てを用いてスメルサーは、社会運動のような集合行動と、パニック、敵意噴出行動などの集合行動との区別を分析的に行う。このようにスメルサーは、集合行動の一般理論の枠組みを示す中で、社会運動と他の集合行動との違いを明確にしたのである。

以上のようにブルーマー、マートン、スメルサーは、社会運動が運動に参加する複数の行為者によって形成、維持される集合行動であること、社会運動において行為者らが相互に作用していること、そのなかで既存のものとは異なる新たな価値、秩序、規範が生み出される点に注目する。しかし彼らは、複数の異なる行為者を常に同質の者としてとらえ、集合行動に関わっている行為者の個別性には配慮しない。このような理論的状況を前提として、こののち60年代以降、社会運動に参加する同質ならざる行為者の行為をめぐって新たな社会運動論が登場するのである。

## 2-2 集合行為の合理性問題

社会運動に参加する行為者を理解する営みは、行為の選択を徹底して分析したアメリカ社会学の伝統の中でさらなる発展を遂げる。こうした理論は、集団内でとりうる行為の選択を数理的に解明することによって、ゲーム理論や経済理論の発展に寄与した。とりわけオルソン(M. Olson)が提起した「集合行為(collective action)」の理論は、社会運動に参加する個別の行為者の行為の意味を吟味する可能性をもたらし、集合行動論から集合行為論への道筋を確実なものとした。

オルソンは、同じ境遇にあっても行為者によって異なる行為を選択することに注目し、それぞれがそれぞれの行為を選択するに至った理由に注目する。オルソンは、まず集団内の当事者すべてに享受される公共的な集合的財とそうでない非集合的財とを区別する。ついで、各行為者は社会の価値や規範にとられる以前に、<合理的な行為>という立場に立ったうえで、自らの功利的な計算を優先して行為を選択する、という。すると行為者は、集合的財を求めて行為者自らが一見過大に思われるコストを払うような行為はあえてしない、という帰結が得られる。参加のコストへの見返りが明確でないような社会運動において、「合理的で利己的な個人は、運動に共通す

る利益、あるいは集合的な利益を完遂することに向けて行為はしない」<sup>15</sup>。むしろ行為者は運動に参加せず何のコストも払わずに、他者の努力によって得られる成果を横取りする「ただ乗り (free rider)」を選択するはずなのである。これが、いわゆるオルソンに発するフリーライダー論である。

この問題提起には、運動を外見的に規定しようとする諸理論への強い批判が込められていた。運動に参加する行為者は決して同質的に運動に動員されるのではない。行為を選択する者の意識は、必ずしもその存在に規定されない。まさに後述するマルクス主義的な運動に対する批判が籠められていたのである。

にもかかわらず他方、コスト相応の見返りがあらかじめ見込めないような社会運動に参加する行為者がいるのはなぜか。そこでオルソンは次に、社会運動への参加を選択するいわば上位の別の理由を示す。それは、参加する行為者が個別に獲得することができる名声、尊敬、友情といった非集合的財の存在である。これらの非集合的財は必ずしも運動が共有する要求と一致するものではないが、参加する行為者一人ひとりが運動に参加するための誘因として働くだろう。オルソンはこうした個別の行為の選択を促す誘因、すなわち「選択的誘因 (selective incentive)」が働くことを示すことによって、行為者は功利的に考えればあいまいなコストと利益とのギャップを埋めることができるとした。

オルソンと同じくオーバーシャル (A.Oberschall) やティリー (C.Tilly) は、通常の参加合理性とは別の理由が社会運動への参加を促す、とする。彼らは運動への動員を可能にする有効な資源の存在に注目する。オーバーシャルによれば、社会運動には物質的なものだけでなく、権威、道徳的責任、信頼、友愛といった非物質的な資源が動員される。とりわけ強調されるのは、社会運動の内部に築かれる自らの地位である。運動を組織する一部の役職に就いた行為者は、集団内でのさまざまな業務を統括的に制御する役割を担うが、こうした地位はときに異なる場面でも活用することができる有用な資源と見なされるのである<sup>16</sup>。

他方ティリーが注目するのは、行為者をとりまく潜在的なネットワークの存在である。ティリーが強調するのは、社会運動を引き起こす集団が事前にネットワークを保持していた点である。運動は既定の戦術、リーダーの資質、人脈といった事前にあった、もしくは外部にあったネットワークを活用する。こうした運動の前提となるネットワークが緊密に形成されていればいるほど、その後にかかる社会運動は活性化される、ということである<sup>17</sup>。このようにオーバーシャルやティリーは、社会運動に参加する行為者が得ることができる潜在的な資源、ないしは事前もしくは外部にありながらも運動への参加を促すような資源の有効性を指摘した。

こうしてオルソン、オーバーシャル、ティリーは行為の合理的な選択について問い直し、非物質的ないしは運動に先在する資源の動員を強調する。彼らは社会運動に参加する複数の行為者がけっして同じ選択をするのではなく、また集合的、物質的な財のみを求めて運動に参加するのではない、ということ強調する。運動に参加する行為者の理解は、より高度に複雑な個人的な次元へと向けられるのである。

集合行動論から集合行為論への理論的發展を通じて、運動に参加する行為の選択に関してさらに新たな問題が生じる。それは非集合的財もしくは非物質的な資源がどのように選択されるのか、選択された場合それらの財もしくは資源はどのように当該の社会運動に動員されるか、である。

まさにこの点をめぐって社会運動に参加する行為者に焦点を当てたさらなる分析が必要とされるのである。

## 2-3 マルクス主義的な社会運動

もう一つの社会運動論としてマルクス主義的な社会運動論があった。この見地は、依然としてヨーロッパを中心に根強く受容されているが、これまで見てきたような社会運動を複数の行為者による集合行為と見る理論とは異なる視点から運動を理解する。つまり階級に基礎を置く構造的矛盾から運動が発生する、とする。こうした認識は、多くの更新を重ねながら、社会運動を説明する理論モデルとして今でも確固とした潮流を築いている。この理論の根底にあるのは「意識を物質的生活の諸矛盾、社会的生産諸力と社会的生産諸関係の間に現存する衝突から説明しなければならない」<sup>18</sup>という認識である。社会運動に参加する行為者は、多かれ少なかれこうした矛盾からの解放を求めて運動に参加するとみなされるのである。

ただし 20 世紀以降のマルクス主義的な理解は、社会運動の発生契機を必ずしも経済的な矛盾に限定していない。グラムシ (A.Gramsci) は、経済的な構造矛盾のみではなく、ヘゲモニー争いの主戦場を政治的・文化的次元に求め、大衆の組織化の中心として有機的知識人という概念を提起した<sup>19</sup>。経済構造のみにとらわれない社会運動へのまなざしは、1960 年代以降いっそう強いものとなる。欧米で台頭する平和運動、環境運動、女性運動、学生運動の拡大は、既存の労働運動や政治運動とは異なる特徴をもつ「新しい社会運動 (New Social Movements)」として注目を集めた。またそれらの社会運動は、脱産業社会、後期資本主義社会といわれるような、時代の特質からの影響を受けていた。ここに、マルクス主義的な理解の上に立ちつつも、そうした諸特徴に注目した<「新しい社会運動」論><sup>20</sup>の潮流が形成されるのである。

その代表格に位置するトゥレーヌは、前述したようにこうした脱産業社会における「新しい社会運動」がもつ特徴について言及する。手短かに再述すれば、68 年の学生運動の根底にはプログラム化された社会を制御するテクノクラシーに対する若者の反発がある、と彼はいう。それは反テクノクラートの特徴を持つ社会運動の姿であった<sup>21</sup>。トゥレーヌが強調するのは、かつての労働運動や政治運動の革新的な運動と比べて、社会運動が活動の対象とする守備範囲が変化したという点である。「社会運動の領域は、社会的、文化的生活のすべての側面に広がっている」<sup>22</sup>。また冒頭に挙げた反原発運動の例を見れば分かれるとおり、運動は未知の将来に向けて何らかの予言をもたらすのである。

次節で論じるメルッチも、基本的にはこの<「新しい社会運動」論>の立場に立脚している。

## 3 . メルッチの集合行為論と行為者への視点

### 3-1 メルッチによる諸理論の批判

これまでの社会運動論では、ある社会運動について、その運動の外見と運動に参加する行為者とはあたかも同質的であるかのように、無矛盾的に語られてきた。メルッチの言葉を借りれば、それは「舞台の上である役割を演じる役者」<sup>23</sup>のようにとらえられてきた。この批判には、かつての社会運動論をけん引してきた二つの理論的潮流を両睨みにした批判が込められていた。

まずメルッチは前節でも述べた集合行為論の課題に言及する。集合行為論は集合行動論を発展

させ、社会運動に参加する行為者に注目し個別の行為者がいかなる選択をするかという視点をもたらした。とりわけオルソンの集合行為論は行為者の行為の意味を強調した。オルソンにとって選択的誘因は、行為者の行為を合理的に説明するための道具立てであった。しかし、メルッチにいわせれば、社会運動に行為者が参加する理由は必ずしも合理的に説明される必要はない。行為者の行為の意味は、決して行為の合理的選択にのみ還元されることはできないのである。

さらにメルッチは、集合行動から集合行為へと発展した社会運動論に対してもう一つ別の角度からの批判を加える。確かに社会運動に参加する行為者はすべてが革命のための闘士ではないとしても、では社会運動に敵はいないのだろうか、対立の源泉となるような契機はないのだろうか。伝統的なマルクス主義は、集合行為論にはない対立の構図を依然として提供しているのではないかと。問題はその対立の構図を現代的に解釈する視点をどう確立するか、である。

そうした問題意識に立ってメルッチは、伝統的なマルクス主義的な社会運動論に対してはどのような批判を加えるのであろうか。それは一言でいえば、社会運動の生起と運動に参加する行為者の意識を構造的矛盾から説明するだけでは不十分である、ということだ。必ずしも常に「社会的存在が意識を規定する」<sup>24</sup>のではない。前節でみたとおりグラムシは、マルクス主義的な運動論が社会運動は経済的な構造矛盾から起こるという前提を立てている点を批判し、矛盾の所在を政治的・文化的次元にまで拡大した。さらにグラムシは、ヘゲモニーを獲得する担い手たる有機的知識人が従属的大衆を指導するとした。だがその具体化を促進する主な装置は大衆政党か教育機関であることを指摘するにとどまった。こうしたことから、メルッチにとってグラムシの貢献は支配 従属関係を拡張した点では大きかったが、いまだ革命的な歴史的課題を展望している点が問題として残った。

他方トゥレーヌは前述のとおり、反テクノクラートの組織化を観察する際の社会学者の介入の仕方について一定の方法論を提示した。それは、社会運動をより高次なものへと方向付けることを狙ったことであった。このようなトゥレーヌの方法論に対してメルッチは、観察者が運動に対して事前に或る発展性を予期ないし期待しているのではないかと批判する。これについてはのちにまた触れることとする。

### 3-2 メルッチの「新しい社会運動」論

このような多方面にわたる複合的な批判を下敷きにして、メルッチは後期産業社会という今日の時代状況のなかで起きる社会運動の解明に向けて、固有の理論を展開する。メルッチは物質的資源に依存した社会から情報化社会への移行を前提に、複雑な現代社会に現れる社会運動と運動に参加する行為者について論じる。今日、環境汚染や核兵器による脅威は、地球という惑星を危機に直面させている。他方でメディアや高度な医療制度を通じて行われる個々人への介入は、行為者の身体へと迫る。メルッチは現代社会のさまざまな矛盾が現れる場を、地球という外的な環境を示す「外なる惑星」と人々の身体の内なる環境を示す「内なる惑星」との二つに区別し、これらが複雑に絡み合う現代社会を「惑星社会( la societa planetaria )」という用語で説明する<sup>25</sup>。このような惑星社会に生起する「新しい社会運動」に参加する行為者は、個人的な感情や生物学的ないし性的アイデンティティをもとに、最も私的な領域であるはずの出産、青年期、壮年期、恋愛、高齢期、死といった生のサイクルをも、運動が取り組むべきテーマとする<sup>26</sup>。このように

メルッチにとって社会運動は、人間をめぐる外なる惑星と内なる惑星との対立を媒介する運動として把握される。社会運動は現代社会に潜在する問題を可視化することで、私的な領域に潜む対立を問い直す「メディア (media)」の役割を果たしている<sup>27</sup>。

ところで社会運動は、行為者ごとに固有の意味を持つ集合行為である。メルッチの集合行為とは、(a) 複数の個人やグループが同時に関わり、(b) 時間と空間の連続性の中で同様の組織的特徴を現し、(c) 一定の社会的領域に関係づけられ、(d) 関わる個人やグループが自分は何をしているかを自ら理解する能力を前提として有する、そうした一連の社会的実践として定義される<sup>28</sup>。集合行為に向けられたメルッチのこうした視点は、一面でマートンやブルーマーに見られる社会運動論を継承している。

ではメルッチ自身は、さらにどのような特徴をもった集合行為を指して社会運動と呼ぶのか。メルッチは、社会運動とは「対立 (conflict)」、<sup>29</sup>「連帯 (solidarity)」、<sup>29</sup>「システムがもつ共存可能性の限界の突破 (breaching of the systems limits of compatibility)」<sup>29</sup>という三つの指向を指標としてもつ行為システムである、とする。これらの指向は社会運動と隣接する類似の集合行為との差異を示す。例えば資本家に対するサボタージュは「対立」を意味する行為であるが、「連帯」や「システムがもつ共存可能性の限界の突破」を指向するのではないから社会運動とは言えない、等々（これについては後に再述する）。

私見によれば、この三つの指向を吟味することが、いまを生きる社会運動の行為者とその行為の意味を理解するための鍵となる作業となるであろう。そうした仮説の下に、以下この三つの指向について少し詳しく吟味したい。

### 3-3 高度情報化社会における「対立」と「名付け」

メルッチが挙げる三つの指向には、それぞれに対応する反対指向が提示される。メルッチによれば「対立 (conflict)」とは互いに同じ資源を価値あるものと認めた二者間の衝突とされる<sup>30</sup>。この対立の対極には「合意 (consensus)」があり、ルールと手続きによって、つまり「合意」によって資源が制御されているのであるならば、それは「対立」ではない。だがメルッチにとって「対立」の眼目は、よく似た集合行為の指向である「危機への反応 (response to crisis)」との対比にある。社会運動のような集合行為は<支配への対立>を指向するのであって、様々な<危機への反応>を指向するのではない。たしかに社会運動はしばしば社会統合の<危機への反応>によって引き起こされる現象として受け止めることが可能な場合がある。例えばもし労働運動が経済的な<「危機」への反応>から発するものであるならば、賃金や労働条件の改善が達成された時点で運動は終息するだろう。他方で<支配への「対立」>は、重大な資源のコントロールと再配置をめぐる衝突である。だから或る労働運動が「対立」を指向するのであれば、まさに運動は資本主義的支配との永続的な闘争となるであろう。

ただし今日の「複合社会 (complicated society)」では、<危機への反応>か<支配への「対立」>かは容易に区別することができない、ともメルッチはいう。核兵器の開発、環境汚染といった今日的な諸問題をめぐる集合行為が、<危機への反応>なのかそれとも「対立」の表明なのかは、権力によって潜在化させられている諸問題をその集合行為がどういう性格の問題として可視化するかに委ねられている<sup>31</sup>。いずれにせよ高度情報化社会において、社会運動は複雑な社会における「対立」の可視化に取り組む役割を担う。それゆえにこの可視化のメカニズムの解明が求めら

れるのである。

しかし、この可視化をめぐってメルッチはさらに独自の議論を展開する。先のトゥレーヌ同様、メルッチの社会運動理論は脱産業社会が帯びている特徴を色濃く反映している。メルッチによれば「複合社会」は、「高密度 (high-density)」な情報が「きつく編まれた (tight-woven)」ネットワークを伴う高度情報化社会である<sup>32</sup>。そのなかで情報は、意味や象徴が生産・再生産される中核的な資源として扱われる。メルッチはこうした高度情報化社会において、情報を形成する強力な「支配コード (master code)」があり、情報という資源の配分には不平等があるとする。この不平等とは、必ずしも情報の量的な配分について述べているのではない。前述の通り情報は複合社会においては中核的な資源であり、諸個人はその情報をもとにさまざまな問題を定義し、意味づけ、行為する。この情報はいまや個々人の行為を動議づけるという点で強力な影響力を持つ<sup>33</sup>。メルッチが強調するのは、情報を制御する強力な支配コードによる支配である。支配コードは、政策や制度、また文化的市場を通じて情報を制御し、新しい集権化と周縁化をもたらす<sup>34</sup>。こうした情報の制御こそが、現代の支配であるとされる。

メルッチが最も強調する「対立」の可視化とは、この制御を暴くことである。メルッチにとって今日の「搾取 (exploitation)」は、意味の構成をめぐる制御権を市民から奪うことである。それは資源としての情報が不均衡に配置されていることであり、支配コードの循環に依存し、意味の生成をめぐるコントロールが市民から奪われていることにほかならない<sup>35</sup>。いい換えれば「支配 (dominance)」とは、人間の経験や消費や人間関係を枠づける「名付け (naming)」の力を各人から奪うことであり、社会によって名付けられた意味への服従を強いること、なのである<sup>36</sup>。したがって「対立」の可視化とは、逆にそれまで潜在していた矛盾をいわば「名付け」返し、支配されていた意味の制御を再獲得することを意味する。かくして「新しい社会運動」という集合行為は、〈危機への反応〉ではなく〈支配への「対立」〉であることが明らかになる。

それゆえにメルッチによれば、今日の社会運動に参加する行為者が取り組むべき第一の課題は、潜在する支配コードを可視化し書き換えていくこと、である。〈支配への「対立」〉を指向する集合行為として社会運動があり、その運動が「対立」を浮かび上がらせる過程で、参加する行為者それぞれの行為の意味が問い直され、修正され、練り上げられていくのである。

### 3-4 「連帯」と集合アイデンティティ

次に、社会運動がもつ「連帯」という指向について吟味したい。「対立」という指向が〈支配への「対立」〉に向けて行為の意味を練り上げるものであるならば、「連帯」という指向は、社会運動に参加する複数の行為者の相互作用の特徴を示している。「連帯」の反対指向は「衆合 (aggregation)」であり「連帯」なき衆合行動はパニックやブームといった集合行為として分析される。同じ集合行為であっても、社会運動に参加する行為者は他の行為者との「連帯」を通じて互いに共感をもつであろう。しかしそれは、すでに外在する価値観を一途に内面化する信仰とは異なる。

メルッチによれば、「連帯」とは「社会的まとまりに所属している行為者の、他者を認識し他者から認識される能力である」<sup>37</sup>。ここからメルッチは、社会運動における行為者個人の自己アイデンティティと並行して、「連帯」という指向の線上で、複数の行為者による「集合アイデンティティ (collective identity)」の形成という概念を提起する。メルッチによれば集合アイデンティ

ティは、(a) 行為の目的、方法、領域についての定義に関わり、(b) 相互作用し、伝達し、互いに影響を与え、交渉し、決定する行為者間の主体的な関係性のネットワークに関係し、(c) ある程度の感情的投資が必要とされるもの、である<sup>38</sup>。さらにこの集合アイデンティティを通じて、参加する行為者の自己性と他者性が「同一化 (identify)」される。その結果、組織のなかで形成される集合アイデンティティは、運動の特性の現れとして外面的に観察することが可能となる、とメルッチは論じる<sup>39</sup>。

こうした集合アイデンティティを議論する途上で、メルッチはオルソンのフリーライダー問題に言及する。前述の通りオルソンは、社会運動への参加について行為者は合理的な行為の選択を行う、とする。合理的で利己的な行為者であれば参加のコストの見返りが明確ではない社会運動には参加せず、むしろコストを支払わずに運動の成果を享受するただ乗りを選択するはずだ、というのである。オルソンはこの自ら提起した難問に対して、非集会的な財という「選択的誘因」がコストと見返りとのギャップを調整する、とした。メルッチはこのオルソンの立論に疑問符を投げかける。すなわち、社会運動に参加するような場合、コストと見返りとのギャップは行為者間によって異なり、一定の「選択的誘因」が整ったからといってすべての行為者が必ずしも社会運動に参加するとは限らないのではないかと。むしろ「行為の領域を再定義する異なるパターンが存在する」<sup>40</sup>のであって、その結果社会運動への参加を回避することもあるのではないかと。メルッチが挙げるパターンによれば、「選択的誘因」があるかないかに関わらず、例えば期待と報酬の釣り合いが取れない場合自ら引きこもり社会的関係性を絶つ「憂うつな選択 (depressive option)」がとられることがある。またやる気が削がれて当の社会的局面から退避する「退出 告発 (exit-voice)」、理念的な自我意識を生成する「昇華 (sublimation)」、社会運動とは異なる「攻撃的 (aggressive)」な反応、などのモデルがありうるのだ<sup>41</sup>。

メルッチによれば、行為者が社会運動に参加するか否かの選択は、必ずしもコストと見返りの収支を調整することによって可能となるのではない。そもそも「どのように人々は行為の結果とそれに関わる投資を比べることができるのだろうか。どのようにして物差しをつくるのか」<sup>42</sup>。むしろ行為者は、他の行為者との相互行為を通じて自らの行為の意味を決定するところにこそ、社会運動の指向を見るのではないかと。その鍵とされるのがまさに「連帯」に向けた集合アイデンティティの概念である。行為者は他の行為者との相互作用を通じて「自身を定義し、行為の結果を認識し、他者からの認識を確信する」<sup>43</sup>。このように、オルソンの集合行為論がそれまでの集合行動論を継承しながらマルクス主義的な運動論を批判することによって得た行為者の差異への視点は、メルッチによってさらにもう一段深められることになった、ということができよう。

### 3-5 「システムがもつ共存可能性の限界の突破」とシステム論

社会運動という集合行為がもつ三つ目の指向は、「システムがもつ共存可能性の限界の突破 (breach of the systems limits of compatibility)」<sup>44</sup>である。この指向は、機能主義的なシステム論を導入しながらも、支配との「対立」というマルクス主義的な構図を維持しようとするメルッチにとって、最も戦略的な概念と位置づけることができる。

メルッチによれば、「システムがもつ共存可能性の限界」とは「システムがその構造 (もしくはそのようなシステムを特定する一連の要素や関係性) を維持し得る体系的な状態という点で、変化することが可能な範囲」<sup>45</sup>である。もし或る集合行為がこうしたシステムの限界を突き破ろう

と指向するのではないのなら、それは社会運動とはいわずに既存のシステムがもつ構造的変性の限界内で秩序が維持されることを指向するだろう。それゆえにここでの反対指向は「システムがもつ〔共存可能性の〕限界の維持 (maintenance of systems limits)」といわれる。

この点で 70 年代の若きメルッチは、社会運動と政治システム<sup>46</sup>との直接的な関係に関心を寄せていた。政治システムとは自らの利害を処理するために機能の関係性を維持するシステムであり、それ以外の要求は利害関係を持つ特殊なフィルターによって濾過されるか、もしくは、周縁部に追いやられる。メルッチにとって社会運動は、こうした制度化された政治的諸規範を打ち壊し、限界を乗り越えようとする試みとしてとらえられていた。一例を引用すれば、『*Sistema politico, partiti e movimenti sociali*』<sup>47</sup> (1977) でメルッチは以下のように論じていた。「権利要求運動は、社会組織の次元に位置づけられ、しかも規範や役割が確定している権力に対する闘争である。…闘争行為は想定される諸限界を越えて参加を推し進めながら、ゲームのようにルール化され制度化されたシステムの限界を壊そうとするのである」<sup>48</sup> (傍点筆者)。こうした記述からもわかるように、メルッチは早い段階から、いかにしてシステムの「限界」を「越える」ないし「壊す」という点に注目していた。

しかし、政治システムを主たる対象として「限界」を打ち破ることへのこだわりは、政治以外のより幅広い領域でも通用する概念へと修正されていく<sup>49</sup>。社会運動という集合行為は、政治システムのみ限定されず、社会や文化といった複数のシステムにも関わっているからである。ここにグラムシとトゥレーヌからの継承が指摘されうるだろう。

かくして『*Challenging Codes*』(1996)では、社会運動という集合行為を分析する指向の一つとして「システムがもつ共存可能性の限界の破れ」が組み込まれることになった。メルッチはこの指向を用いることで、マルクス主義的な支配 従属関係という基本構図を維持しながら、社会運動という集合行為をシステム論的に説明しようとしたのだろう。社会運動という集合行為の分析は、それが既存のシステムがもつ限界をどのように突破しようとしているのかに注目することによって、支配 従属関係を可視化するのである。

「対立」、「連帯」、「システムがもつ共存可能性の限界の突破」の三つは、社会運動と他の隣接する集合行為とを差異づける社会運動に固有な指向であった。これらが三つとも揃ってはじめて社会運動と呼ばれる。では一つでも欠ける集合行為にはどのようなものがあるか。社会運動に隣接するそうした集合行為の例として、メルッチはまず「競争 (competition)」を挙げる。というのも、既存のシステムの限界内で「対立」と「連帯」の二つを指向するのが「競争」だからである。他方「協同 (cooperation)」は、「連帯」を土台としながら「対立」を指向せず、「システムがもつ共存可能性の限界の突破」も求めない集合行為の名称である。また「反動 (reaction)」とは、「対立」には向かわず「連帯」と「システムがもつ共存可能性の限界の突破」を指向する集合行為のこととされる。さらには、「個人の抵抗 (individual resistance)」と呼ばれる行為があって、これは「対立」と「システムがもつ共存可能性の限界の突破」を指向しながら「連帯」を指向しない非集合行為である、等々<sup>50</sup>。このようにしてメルッチの社会運動分析は、システム論的な説明を通して社会運動自身の分析を可能にしつつ、同時にそこに参加する行為者の差異をも明らかにしようとするのである。

こうした社会運動の分析方法は、トゥレーヌの視点、ひいてはマルクス主義的な伝統を継承し

ながらも、運動を観察するには禁欲的な姿勢が必要であることを示唆する。実際メルッチがトゥレーヌを批判するのは、まさにこの点である。メルッチは、社会運動を価値的に評価するような分析はしない。マルクス主義的な社会運動論は、運動の将来に常に何らかの意味を見いだそうとしたために、運動の「いま」を理解することができなかった。ここに「いまを生きる」社会運動論の意味がある。この視点を社会運動論に補ったのは、メルッチの集合行為論の貢献であった。

## 5. おわりに

最後にこれまでの議論をふりかえるとともに、今日の社会運動に参加する行為者の分析をめぐるさらなる課題を確認したい。本稿ではまず集団行動論、集合行為論、マルクス主義的社会運動論といった既存の社会運動理論を概観するなかで、それらの持つ諸理論の特性を挙げてきた。集合行動論から集合行為論への発展は、社会運動という集合行為の外面的理解から、行為者の行為の意味を問う分析へと視点をシフトしている。マルクス主義的な社会運動理解は、脱産業社会の今日においても支配 従属という構図を維持しながら、労働運動や政治運動のみには納まりきらない諸問題に立ち向かう「新しい社会運動」の理論化を目指した。

メルッチは、これらの諸理論を乗り越えるために、高度情報化社会という新たな時代状況を前提に、社会運動が「対立」、「連帯」、「システムがもつ共存可能性の限界の突破」の三つを指向する集合行為であるとする。他方、社会運動の分析はまた、運動に参加する複数の行為者の間の相互行為に焦点が当てられなければならない。社会運動に参加する行為者は、他者と自らを同一化するプロセスに関連しており(集合アイデンティティの形成) 自己は他者との相互認識において自らが決定すべき行為の意味を練りあげる(自己アイデンティティ) ところすでに確認したとおり、メルッチにとって「対立」という指向は、現代社会においては情報という資源の制御と再配置をめぐる支配コードとの衝突を意味した。とりわけ情報は、自己の行為の意味を構成するための中核的な資源である。行為の意味は、個々人が社会的支配による制御に陥るか、他者との相互認識を獲得するかによって決まるのである。したがって、支配に「対立」し自らの「名付け」を奪還しようとする者は、他者との「連帯」を通じて「私たち(we)」の形成に向かうのである。では「限界の突破」と行為者の意味づけとはどのように関連するのか。これはわれわれに残された今後の課題の一つであるといえるであろう。

他方トゥレーヌへの批判からもわかるように、メルッチは特定の発展法則に依拠した運動評価には懐疑的であった。メルッチは、特定の社会運動が他の運動と比べて上位の意味を保持しているとするような観察者としての介入はしない。この点についてメルッチ自身は、運動の「主体にとって何が良いかを知っているなどと〔私は〕いったりもしない」<sup>51</sup>と述べている。彼はむしろそうした介入を避けるための観察手法の構築や理論化に努めた<sup>52</sup>。たしかに仁平が指摘するように、すでに今日では「特定の〔社会運動の〕形態に規範的意味を読み込むような段階論 = 歴史哲学は失効した」<sup>53</sup>のである。

より個人化が進み、運動に参加する行為者の断片化が進むなかで、近年展開される社会運動論では、現代の社会運動にはその運動と運動に参加する行為者とが乖離するところに特徴があると強調している。社会運動に参加する行為者は、そのときどきの目的に応じて暫定的に参加するのであり、自らのライフプランの一環として位置づけたうえで運動に参加する。例えばマクドナルド(K.McDonald)は、今日の社会運動は“連帯”から“流動性(fluidarity)”へ、“集合アイ

デンティティ”から“自己の公的経験 (public experience of self)”へとシフトしているという<sup>54</sup>。

するともはや運動は、現れては消える、中心を持たない散発的な出来事ではないのであろうか。社会運動という集合行為に特質的な三つの指向の内的な相互関係や、それらとの関連のなかで行為者に共通する行為の意味がいかに確立されるかについて、メルッチの研究からさらに新しい社会科学的な方法が探りだされなければならない。

#### 注

<sup>1</sup> 例えば、現在進行中のチュニジア、エジプト、リビアをはじめとする第三世界での民主化の動きは、この間の経済のグローバル化と密接に連動している。他方、東日本大震災によって起こった原発事故は、核の使用が日常生活にもたらす利便性と身体に及ぼすリスクとが表裏の関係にあることを鋭く示している。

<sup>2</sup> トゥレーヌは反原子力運動を預言者というメタファーで表現し、以下のように述べている。「預言者がすべからくそうであるように、反原子力運動は、人間のあり方を定めるべき要件、ないし諸原則を説く」。Alain Touraine, *La prophétie anti-nucléaire*, Edition du Seuil, 1980, 伊藤るり訳『反原子力運動の社会学 未来を予言する人々』新泉社 1984年、p.306。

<sup>3</sup> Alberto Melucci, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Temple University Press, 1989, p. 55. 山之内靖ら訳『現在に生きる遊牧民』岩波書店 1997年、p. 58. 表題からもわかるように山之内らは present を「現在」と訳しているが、本論文では「いま」とすることとする。

<sup>4</sup> Alberto Melucci, *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*, Cambridge University Press, 1996a, pp. 23-24.

<sup>5</sup> 山之内靖ら訳、前掲書。

<sup>6</sup> Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in a Planetary System*, Cambridge University Press, 1996b. 新原道信ら訳『ブレイング・セルフ - 惑星社会における人間と意味』ハーベスト社 2008年。

<sup>7</sup> Alberto Melucci, *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*, Cambridge University Press, 1996a.

<sup>8</sup> Robert K. Merton, *Social Theory and Social Structure: Toward the Condensation of Theory and Research*, The Free Press, 1949. 森東吾ら訳『社会理論と社会構造』みすず書房 1961年、pp. 327-328.

<sup>9</sup> Herbert Blumer, *Symbolic Interactionism Perspective and Method*, University of California Press, 1986. 後藤将之訳『シンボリック相互作用論：パースペクティブと方法』勁草書房 1991年、pp. 2-6.

<sup>10</sup> Herbert Blumer, Social Problem as Collective Behavior, *Social Problems No. 18*, 1971, pp. 298-306.

<sup>11</sup> Herbert Blumer, Collective Behavior, *Principles of Sociology, No. 26*, 1946, p. 199.

<sup>12</sup> ブルーナーの集合行動論は、社会運動における行為の相互性の把握に関してはミード (G. Mead) を前提にしている。社会運動が形成される際、その運動全体に特有の目的意識や方向感覚、つまり「私たち (we)」という「連帯」の感覚が構成され、新たなアイデンティティや「客我 (me)」が産み出されるという (George Herbert Mead, *Mind, Self and Society*, Chicago University Press, 1967. 稲葉三千男ら訳『精神・自我・社会』青木書店 1973年)。同様にクロスリーも、これまで社会運動の分析が見過ぎてきた点として、運動内部での行為者の相互行為に注目している (Nick Crossley, *Making Sense of Social Movements*, Open University Press, 2002. 西原和久ら訳『社会運動とは何か』新泉社 2009年、pp. 44-47)。

<sup>13</sup> Niel Smelser, *Theory of Collective Behavior*, The Macmillian Company, 1963, p.82. 会田彰ら訳『集合行動の理論』誠信書房 1973年、pp. 102-103.

<sup>14</sup> Ibid. 同上書 p. 60.

<sup>15</sup> Mancur Olson, *The Logic of Collective Action*, Harvard University Press, 1965, p.2. 依田博ら訳『集合行為論』ミネルヴァ書房 1983年 p.2.

<sup>16</sup> Anthony Obershall, *Social Conflict And Social Movements*, Englewood Cliffs, 1973, p. 28.

<sup>17</sup> Charles Tilly, *From Mobilization to Revolution*, Addition-Wesley, 1978 p. 63.

<sup>18</sup> K・マルクス 武田隆夫ら訳『経済学批判』岩波書店 1956年、p.14.

<sup>19</sup> グラムシ (A. Gramsci) は、伝統的なマルクス主義の運動理論について、経済的下部構造を前提とする点を批判し、上部構造における文化的・政治的側面の重要性を強調した。彼は、労働組合は「客観的には、労働力[労働者]が市場の制御に向けて団結する際に資本主義体制のなかでとる、また労働力商品のみがとりうる形態である」として、独自の労働者民主主義を唱えた。Antonio Gramsci, *Opere di Antonio Gramsci 1913-1926*, Giulio Einaudi editore, Torino, 1987.

<sup>20</sup> <「新しい社会運動」論>については、*Social Research*, 52, No4, 1985で、メルッチ、トゥレーヌをはじめ

ピッツルノ、コーエンらが基礎的な視点を述べている。

- <sup>21</sup> Alain Touraine, *La Société Post-Industrielle*, Société Nouvelle des Editions Gonthier, 1969. 寿里茂ら訳『脱工業化の社会』河出書房新社 1970年、p. 115。
- <sup>22</sup> Alain Touraine, An introduction to the Study of Social Movements, *Social Research*, 52, No4, 1985, p. 778.
- <sup>23</sup> 山之内靖ら訳 前掲書、p. 266。
- <sup>24</sup> マルクス前掲書 武田隆夫ら訳、p. 13。
- <sup>25</sup> Melucci Alberto, *Diventare Persone: Conflitti e nuova cittadinanza nella società planetaria*, Edizioni Gruppo Abele, 2000. p. 34. なお、注6に示した *The Playing Self*でも、個人の内面への深い洞察が行われている(例えば内的惑星の議論は原書では p. 62)。
- <sup>26</sup> Melucci, 1996a, *op. cit.*, pp. 102 - 103.
- <sup>27</sup> *Ibid.*, p. 359.
- <sup>28</sup> *Ibid.*, p. 21.
- <sup>29</sup> *Ibid.*, pp. 23-24.
- <sup>30</sup> Melucci, *op.cit.* 1996a, p. 22, conflict はメルッチが多義的に幅広く用いている語であるが、本稿では「対立」という訳語をあてた。
- <sup>31</sup> Melucci, 1989, *op.cit.*, p. 87.
- <sup>32</sup> Melucci, 1996a, *op.cit.*, p. 8.
- <sup>33</sup> Melucci, 1996a, *op.cit.*, p. 180. 山之内は、この点について前言語的な生活世界そのものが対立の場になっていることを強調している(山之内靖『システム社会の現代的位相』岩波書店 1996年、pp. 248-256)。
- <sup>34</sup> 長谷川は、メルッチが言及する高度情報化社会について、「新たな社会構造の定義へ創造的に議論を展開できるようにする」と評価している(長谷川啓介「声とまなざし・再考 アルベルト・メルッチの『社会運動の社会学』」庄司興吉編著『世界社会と社会運動 現代社会と社会理論：相対性と個体性との媒介』梓出版社 1999年、p.220)。
- <sup>35</sup> Melucci, 1996a, *op.cit.*, p. 180.
- <sup>36</sup> *Ibid.*, p. 180.
- <sup>37</sup> *Ibid.*, p. 70.
- <sup>38</sup> *Ibid.*, pp. 70-71.
- <sup>39</sup> *Ibid.*, p. 73.
- <sup>40</sup> *Ibid.*, p. 56.
- <sup>41</sup> *Ibid.*, p. 58.
- <sup>42</sup> *Ibid.*, p. 57.
- <sup>43</sup> *Ibid.*, p. 57.
- <sup>44</sup> *Ibid.*, p. 25.
- <sup>45</sup> *Ibid.*, p. 25.
- <sup>46</sup> Melucci, *Sistema politico, partiti e movimenti sociali*, Feltrinelli, 1977.
- <sup>47</sup> *Ibid.*, p. 96.
- <sup>48</sup> *Ibid.*, p. 96.
- <sup>49</sup> Melucci, *op.cit.* 1996a, p. 37.
- <sup>50</sup> Melucci, *op.cit.* 1996a, p. 23.
- <sup>51</sup> 山之内靖ら訳、前掲書、p.263。
- <sup>52</sup> <インタビュー>「新しい社会運動と個人の変容」(アルベルト・メルッチ 聞き手山之内靖、矢澤修次郎)『思想』岩波書店、1995年3月、p.16。
- <sup>53</sup> 仁平典宏「『NPO 革命と反革命』 敵対性を胚胎する場所をめぐって」報告集『市民エージェントの構想する新しい都市のかたち』一橋大学 2009年所収、p.264。
- <sup>54</sup> Kevin McDonald, From Solidarity to Fluidarity: social movements beyond 'collective identity' - the case of globalization conflicts, *Social Movement Studies*, Vol. 1, No. 2, 2002, p.4.

(2012年3月31日提出)

(2012年5月18日受理)

# Analysis on Actors in Social Movements of the Present

## Focusing on the Research of Collective Action Theory of Alberto Melucci

HOSAKA, Naoto

The United Graduate School of Education, Tokyo GAKUGEI University

SHIBUYA, Haruyoshi

Faculty of Education, Saitama University

### Abstract

The purpose of this paper is to examine methodological issues of analysis on actors in social movements, particularly the research of collective action theory of Alberto Melucci. Social movements and their actors have been important subjects in social science study. Social movements have been major objects in sociology, namely among theory of collective behaviors, functionalism, mobilization of resources theories and Marxism, etc. However they don't have validity enough to analyze social movements of today. Therefore, it is indispensable to have an alternative view to methodological issues of analysis on that.

Firstly, this paper refers to social movements theories. They distinguish such actions that they claim against existent organizations from that they are deviant (Merton). There are also "rational, self-interested individuals" in a movement (Olson). Recent Marxism identifies not only economic contradictions as a cause of movements but also cultural and social factors (Touraine).

Then A.Melucci arranges these contributions systematically, and suggests an original theory of "New Social Movements". He observes a social movement as a collective action which is oriented to "conflicts," "solidarity" and "breaching of the systems limits of compatibility." These terms are keys of theory of Melucci. "Conflicts" contend not only for material resources but also for symbolic ones. "Solidarity" suggests interaction between actors in the movements. "Breaching of the systems limits of compatibility" implies that the movements erode existent order, norm and system.

Through these theories, social movements can be understood more analytically.

Key words : Alberto Melucci, Collective action, New Social Movement, Conflicts, Solidarity, Breaching of the limits